

# 自力を捨てる～守護の神靈に全託する勇氣を持て！～

2012 年 4 月

## 勇氣を出して守護の神靈に全託せよ

### 勇氣を出して守護の神靈に全託せよ

言うまでもありませんが、山中の冬の時期は寒くて、暖房のない朝の部屋は気温 10 度ほどです。雪の多い北国よりはもちろん暖かいのですが、暖房がなくてはとても生活してゆけません。今はクリーンヒーターという暖房器具があって、このような山中の中でも快適に過ごせることは有り難いことです。人間が快適に暮らせる気温は 20 度前後で、湿度は 50 度前後ですが、こんなことを改めて思うようになったのはここで生活するようになってからで、人間は環境に順応性があるものの、気温 10 度のようなまるで冷蔵庫の中のような部屋では、布団をいくら掛けても寒くて眠れませんし、風邪を引いてしまいます。

ちなみに、北欧には冬の期間だけオープンする氷でできたホテルがあって、室内は零下 10 度で、寝袋にくるまって寝るそうです。その幻想的な美しさに惹かれて多くの観光客が来るそうですが、世の中には何とまあ物好きな人がいるものです。人間というのは面白いもので、冬の海にブルブル震えながら飛び込んでみたり、わざわざ危険なスカイダイビングやバンジージャンプをして楽しんでみたり、空気のない月へ飛んで行ったりと、肉体の束縛を超えて自由に活動したいと思うのですが、それは本来の人間が靈性で、自由に活動できる存在であるからです。本来は自由であるとしても、今は肉体を持っている以上、肉体界の法則を知って生きてゆかねばなりません。

気温と湿度の話に戻りますが、肉体は暑過ぎても寒過ぎても生きてはゆけません。湿度も高過ぎれば鬱陶しい気分になりますし、食品は腐りやすくなります。反対に湿度が低過ぎればウイルスが活発になり、風邪を引きやすくなります。肉体にはこのように適度な気温と適度な湿度の環境という制約があります。その肉体の法則に合わせて暖房器具や冷房器具が発明されているのであり、入浴に適したお風呂もあるわけです。それと同じく宗教の道も、肉体を持って生活している限りは、肉体生活に無理のかからぬように靈性を開発してゆかねばならないのです。病気になりたくないのに病気になり、貧乏になりたくないのに借金してしまい、不幸になりたくないのに不幸になり、災難に遭いたくないのに災難に遭い、争いたくないのに争い、戦争をしたくないのに戦争をしてしまい、地球を滅亡させたくないのに核兵器を持ってしまうというふうに、今や私たちの地球世界は肉体人間の意思力だけではどうにもならぬ時代になってしまっているのです。このような時代で、今さら「心の法則（想念の因果法則）」をやってみたところで、業因縁の転回の方が烈しくて、少しくらいの善念を積極的に思おうとしても、悪想念の圧倒的な力の前に押しつぶされてしまうのです。積極思想では人間は幸福には成り得ないのです。また、肉体人間にとって、真理をそのまま行じること、これまた至難のことでありまして、理想ばかりを追いかけて現実から逃避していれば、この世での生活ができなくなってゆくように、真理の言葉ばかりを唱えてみても、現実生活とあまりにもギャップがありまして、真理を現実

現すことは不可能なのです。その結果、真理をあたかも実行しているかのような偽善者になってしまったり、正直な人は非常に心苦しくなってくるのです。

効果のない修行法をどんなに熱心にやっても靈性は開発されません。時間の無駄となるだけです。それは地獄の賽の河原で、石を積み上げては鬼に崩され、また石を積み上げては崩される、しかし、それでもなお際限なく無駄な作業をさせられるというのと同じで、これほど辛い作業はありません。自力の難行苦行をしている人たちは、この世にいながらにして、この地獄の行をさせられているのです。自力行者たちは、「この方法では駄目なんだ！」と心の奥底から気づくまで難行苦行の道を歩まなくてはならないのです。「苦行は悟りの因にあらず」と釈尊が説いた通りです。

先日フジテレビ系列の「永六輔の会いたい対談」で百歳になる永平寺の宮崎貫首が出演されていましたが、自力行の代名詞のような禅宗の代表者が「私は観音さまを信仰している」とお話し、また、「自然に任せて生きております」と他力行者のようなお話を繰り返し説かれていました。禅宗と言っても、古来は念仏を唱えながら座禅を組んだりしていた時代もあったのですから、禅宗を簡単に自力行と決めつけてはいけないのかも知れません。自力行の禅を修行しているうちに、宮崎貫首のようにいつのまにか他力行の禅になってしまう姿こそ禅の本来の目的なのかも知れません。私がいつも言うております自力の難行苦行とは、曹洞禅や臨済禅のような仏を敬っている禅宗の行法のことではなくて、自己の外部から援助してくれている守護の神霊の存在を認めない「念力による行法」のことを指しているのです。

守護の神霊に頼らずに靈性開発できる方法などはありません。知性の高いインテリに見られたいがために、「人間は神の子であり、自己の内部に神性があるのだから、自己以外の他の何者にも頼るな」と説いている宗教者がおりますが、自己の内部神性に守護の神霊が実在していることを知らなくてはなりません。肉体人間は守護の神霊に頼らなくては、いつまでたっても神性を開発することはできません。「他に頼る」という行為が如何にも知性のない人に見られるような気がして、自分を神のように偉く見せたい人たちは、なかなか素直に他力行に転向できないでいるのです。「自力ではもうどうにもならぬ」という切羽詰まった事態に陥るまで守護の神霊に頼ろうとしないのですが、それは言い換えると、守護の神霊に頼らないでいると、自力ではどうにもならぬ困難な事態に何れは直面する羽目になるということでもあるのです。他人に頼る依頼心と守護の神霊に頼る全託心とは同じような想念とと思っている人が多いのですが、その内容は全く異なっているのです。他人に頼る依頼心は業想念の怠惰であり、守護の神霊に頼る全託心は本心の勇気なのです。守護の神霊に全託した人は真に独立自尊の人となるのです。

守護の神霊に頼って、守護の神霊に助けられて生きていけば平穩無事に生きられるものを、守護の神霊の手を借りようとせず自力だけで生きてゆこうとしますと、守護の神霊の靈的な応援が得られないのですから、次々と困難な運命が現れてくるのです。靈界から守護の神霊が靈力を用いて助けて下さるからこそ、現世の私たちは何事もなく無事に安心

して生きられるのでありまして、もし守護の神霊による霊的な援助がなければ、私たちは不安動揺の毎日を送らねばならなくなるのです。守護の神霊は神界と肉体界をつないで下さるのでありまして、真理と現実の大きなギャップを埋めて下さる存在でもあるのです。真理そのままを実行できない私たちを守護の神霊は赦して下さり、私たちの業想念を浄め、少しずつ真理が現れるように助けて下さっているのです。ですから、守護の神霊に加護を祈り、感謝し続けてゆくことが、自己の運命を改善するにも世界を平和にするためにも絶対に欠かせない行法である、勇気を出して守護の神霊に全託しなさいと私は教えているわけです。

「私は神の子である」と宣言したり、「私は既に自己完成した。私は完全である」と理想の姿を口に出すことは誰にでも容易にできますが、現実に行うことはそんなにたやすいことではありません。自己の心境がそこまで至っていないのに、安易に真理の言葉を口に出しておりますと、見せかけの嘘をつくことが習慣となってしまうと、現実の行為が真理の言葉に伴わず、矛盾した言動をしても少しも矛盾していることに気づかなくなってしまうのです。そんなことをしておりますと、神の子になるどころか、却って偽善の皮が厚くなるばかりで、正直でない、うさん臭い人物に見られてしまうのです。

『私は神の子である』という真理の言葉を唱えていれば、心の法則によっていつかは自分は神の子になれるだろう、真理が現れるだろう」と安易に思っている人が案外いるものですが、そんなに簡単に神の子を現すことはできません。「私は神人である」という看板を首からぶら下げた嘘つきばかりが増えるだけです。『あの人はインテリではない』と他人から低く評価されるかも知れない」という臆病を捨てなさい。「他人から馬鹿にされたくない」「自分を偉く見せたい」という虚栄心を捨てなさい。『あの人は弱い人間だ』と見られたくない」という強がりも捨てなさい。守護の神霊の力なくしては自分は何事も為し得ないことを正直に認めなさい。臆病を捨て、嘘を捨て、虚栄心を捨て、強がりも捨て、裸の心になることです。無理な難行苦行をしたところで効果はありません。勇気を出して守護の神霊にお任せしなさい。それが今のあなたに一番ふさわしい最も自然で適当な行であるのです。

### 五井先生の教えは守護霊守護神教

五井先生の教えは「守護霊守護神教」です。これは五井先生ご自身が「私の教えは守護霊守護神教」とおっしゃっていました。そして、守護霊守護神を信仰の対象にして何を祈るのかと申しますと、ご承知の通り「世界平和の祈り」を祈るわけです。この「世界平和の祈り」は個人人類同時成道の祈りであり、現代の地球人類にふさわしい祈り言で、しかも幼児でもご老人でも分かりますし、人種や宗教を超えて理解できる祈り言であるのが特長です。世界平和実現ほど個人にとっても人類にとっても大きな目標はありません。この人類最大の目標を祈り言にしたのが「世界平和の祈り」なのですから、「世界平和の祈り」以上の祈り言は地球人類史上にはもう現れないのです。

私たちにとって幸せなのは、これから「世界を平和にするにはどうしたらよいか？」と  
思い悩む必要がないことです。世界平和実現への道がもう既に指し示されたのですから、  
日々実践してゆくだけでよいのです。これは実に有り難いことであると思います。ただ、  
この方法は、信じることのできる人と信じない人の二通りがあります。信じることのでき  
る人はもうそのまま救われるのですが、信じない人にとっては何の解決にもなりません。  
そこで今後は、守護の神霊を信じられない人や祈りの力を信じられない人をも救う平和科  
学を研究する必要があります。

「私のいる高い所へ登って来い」と説く宗教者は、現代の宗教者としてはもう古い過去  
の在り方です。これからは、全ての人々を救うために、自ら民衆の立場に立って、宗教を  
信じない人々、神も仏も信じない人々、自分に敵対する人々をも救う道を考えてゆかねば  
なりません。自分の言うことを聴く人だけを救って、「自分の言うことに耳を傾けない奴  
は勝手に地獄へ行け」と言っていてはいけません。全ての人々を救う大きな大きな愛を持  
たねばなりません。そうした大きな愛を持つためにも、平和科学を発見し、平和科学を具  
体的に生かすためにも、私たちの「世界平和の祈り」が必要となるのです。平和科学がこ  
の地球上に一日も早く授けられることを願って、私たちは日々「世界平和の祈り」を祈っ  
てまいりましょう。

## 質疑応答：自力行と絶対力

### 他力行即絶対力

先に『『私たちが世界を平和にする』という表現が正しいのか否か』という質問があり  
ましたが、こうした言い方も必ずしも誤りではありません。肉体人間の立場に立てば「守  
護の神霊によって世界を平和にさせていただく」という表現が適当であり、神の子人間の立  
場に立てば「私たちが世界を平和にする」という表現が適当となるのですから、どちらも  
正しいのです。そういった意味で、「私たちが世界を平和にする」という言葉に、「守護  
の神霊に全託し、神我一体の絶対力を発現した私たちが世界を平和にする」という意味が  
含まれているのであれば、守護の神霊に助けを求めようとせず、自力だけを認めた「私た  
ちが世界を平和にする」という意味とは全く異なるのです。

内なる神だけを認め、外部からの働きかけである守護の神霊を認めないことがさもイン  
テリのように見えるので、内なる神の発現だけを説いている宗教者がおりますが、守護霊、  
守護神は真実は内なる神に含まれているのでありまして、守護の神霊の応援なくしては自  
己の内部神性は発現できないのです。守護の神霊に助けを求めずに、「私は神である」と  
いう想念を自己に言い聞かせて自己の内部神性を顕現させようとしても、それは不可能で  
あるのです。自己の内部神性でさえ顕現できないのですから、他人に向かって「あなたは  
神である」と宣言したり、「あの人は神である」と幾度唱えてみても、対する悪人が善人

に変わったり、病人が健康人になることはないのです。一時的に他者暗示をかけることはできても、他人の神性を顕現することはできません。真理の言葉を何度唱えても、真理はそうやすやすと実際行為に現れることはないのです。真理宣言法は、真理を実行できる人以外は、真理が顕現されるどころか、却って偽善者を生んでしまうのです。

守護の神靈に全託しようとせず、内なる神と言って自力だけで自己の神性を現そうとしても、世界を平和にしようとしても、神性も平和も実現することはできません。それはなぜかと申しますと、自力想念の力だけで真理を現せるほど業想念の力は弱くはないからなのです。業因縁の力というのは過去世から今生の運命を左右している非常に大きな力でありまして、自己の想念力で業因縁を超えることは容易ではないのです。そこで、業因縁を超えることのできる守護の神靈に助けを求める必然性が出てくるのです。

「神様（守護の神靈）、世界人類が平和でありますように、お願いします」と守護の神靈に全託する行為は、一見すると弱々しく見えるのですが、いつも申し上げておりますように、「他力行即神我一体」の変換原理によって、守護の神靈に他力しますと、神我一体の絶対力が自然に自己の行為に現れてくるのです。この絶対力こそ最強の力であるのですから、それまでの弱々しさはすっかり消え去って、如何なる苦難にあっても挫けず、立ち向かってゆけるほどの強く逞しい勇氣に満ちた自己に生まれ変わっているのです。ですから、私たちは「世界平和の祈り」を通して守護の神靈に全託するだけでよいのです。

この想念波動変換原理が分らないと、いつまでたっても真実に守護の神靈に全託することができません。自力だけで神性を顕現しようと、思いつく限りの種々の行法を何年やってみても、神性を顕現することは不可能なのです。守護の神靈に全託する以外に、自己の神性も人類の神性も開顕することはできないのです。この真実が分かる日まで、自力行者の自力行は果てしなく延々と続けられるのです。つまり、「自力行即神我一体」とはならないのです。あくまでも「他力行即神我一体」「他力行即絶対力」であるのです。この意味が理解できた人こそ「世界平和の祈り」の道に正しく乗った人と言えるのです。

## 自力行と絶対力行為

### 【ご質問-1】

五井先生の教義には、「『消えてゆくのである』という『強い信念』と『今からよくなるのである』という『善念』を起こし」とありますので、ここところが、「何としてもそう思わなくてはならないのか？ 努力して、そういう信念を養わなくてはならないのか？ ちょっと自力っぽいな？」と、ずっと引っかかっていたのです。

そうすると、「守護神様、守護霊様、どうか消えていきますように、お願いします」ということで、全託を繰り返してゆけば自然と強い信念が持てるようになってゆき、無理なく善念も起こせるようになるかと解釈してよろしいのでしょうか。

### 【お答え-1】

このご質問については、以前にも簡単にお答えいたしました、「教義にある《強い信念を起し、善念を起す》という行為は自力なのか？」という大事な問題について詳しく解説することにいたしましょう。

「守護霊様、守護神様、どうか業想念が消えてゆきますように、お願いします」と神への全託を繰り返してゆけば、自然と「業想念は消えてゆくのである」という強い信念と「今から善くなるのである」という善念を起こせるようになってくるのです。これを私は想念波動変換原理と呼んでおります。従いまして、自力で「業想念は消えてゆくのである」と念じたり、「今から善くなるのである」と力む必要はないのです。このように、私は五井先生の絶対他力の教えをより絶対他力に徹した表現に統一するようにしているのです。私の教えは五井先生の教えそのものであるのですが、私の体験を生かして、その表現をより他力的にしているのです。私の立場は法然さんに対する親鸞さんの立場に似ているのです。

教義にある「強い信念を起し、善念を起す」という行為は、自発的行為ではありますが、自力ではありません。かといって他力行でもありません。本心の行為、絶対力の行為であるのです。絶対力というのは他力行を超えた境地です。五井先生は他力行と絶対力の行為をことさら区別することなく実行できるのです。しかし、絶対力の境地に至っていない凡人にとりましては、そうやすやすと絶対力の行為をすることはできません。そこで想念波動変換原理を知りませんと、絶対力の行為を真似しようとして、どうしても自力行に陥ってしまうのです。

五井先生は、神我一体の立場から話している時と肉体人間の立場から話している場合の二つがあります。私にはそれが区別できるのですが、普通の人には区別できません。そのために、普通の人には五井先生から教えられた通りに五井先生の真似をしようとして無理をしてしまうことがあるのです。そこで私は、絶対力の行為については言わないで、肝腎な方法だけを説くように努めているのです。すなわち、「世界は平和になる信念で『世界平和の祈り』」と教えているのです。「業想念は消えてゆくのである」という信念も、「今から善くなる」という善念も、自力的な行為と思われがちですが、真実は、これは自力的な思念ではなく、神我一体の絶対力から現れてくる自然法爾の行為であるのです。そして、このような絶対力の信念行為は、自ずから行為されてくるものとして、私はひたすら守護の神霊への全託行のみに集中させているのです。

絶対力と自力は同じように見られますが、内容は全く違います。五井先生は、絶対力の立場から『消えてゆくのである』という強い信念と『今から善くなるのである』という善念を起しなさい」と説いているのでありまして、「自力でこう思い込め」と説いているわけではないのです。他力想念が神のみ心の中で絶対力に自動変換されると知れば、自力の想いを出す必要はなく、ひたすら神への全託に統一しておくことができます。

自力で念じて行じている行為と絶対力の境地から自然法爾に行じている行為は、はたか

ら見ていると区別できません。しかし、自力行と絶対力行為とは同じ行為に見えていても、内容は全く違います。たとえば「感謝しなければならない」という形式的感謝行や「愛の行為をしなければならない」という形式的愛行は自力行であり、真実に溢れてくる感謝行為や愛行為は絶対力行為であるのです。「自分を神の子に見せかけよう」としたり「他人を神の子と拝まなければならない」という行為は自力行であり、自然法爾に自分や他人を神の子と思えるようならば、それは絶対力行為であるのです。そして、その絶対力の境地は他力行によって達することができるのです。

五井先生ほどの境地になりますと、他力行を超えて既に絶対力の境地にいるのですから、「業想念は消えてゆく姿である」という強い信念が自ずと湧いてくるようになっており、「必ず善くなるのである」という善念もまた自然に湧いてくるようになっているのです。五井先生は努力してそう信念し、善念を起しているわけではありません。他者から見ますと努力しているように見えるのですが、五井先生本人はひとりでにそのように信念し、善念を起しているのです。五井先生にとっては、その絶対力の行為は何でもなく易しい行為であるのです。しかし、五井先生にとっては易しい行為であっても、絶対力の境地になっていない普通人にとっては非常に難しく、そのままを実行しようとしますと自力行になってしまうのです。そこで私は、無理な絶対力行為をいきなりやらせず、他力行の「世界平和の祈り」だけを行じさせるように説いているのです。「世界平和の祈り」を祈っていれば、誰もが五井先生のような聖者へと変貌を遂げてゆくのです。自力行と絶対力行為の違いをはっきりと知っておいて下さい。

## 【ご質問-2】

五井先生のお歌に「迷い心 迷へるままに まず為さめ 世界平和の 神の祈り言」というのがあります。「迷い心」というのは「業想念」或は「煩惱」と言い替えてもよいと思います。そうすると、このお歌の意味は、業想念を解決してから祈るのではない、高い心境で祈らなくては意味がないのではない、業想念は業想念のままでよいから、それにいちいち把われず、「世界平和の祈り」を唱えることで、それが浄化、もしくは本心に段々と転換されてゆくのだ、「煩惱即菩提」ということだと思えます。

ところで、『世界平和の祈り』への不信」というのも業想念の一つかと思いますが、いわば根底の信さえ立てられない心境や状態、『世界平和の祈り』なんて唱えたってどうなるものか」といった気持ちで唱えた場合はどうなのでしょう（そんな人は始めから唱えないと思いますけど）。

また、親鸞と法然では、少し念仏に関する考えが違っているように感じるので。法然はとにかく称名ということを強調します。理屈はともかくまず唱えよというようなニュアンスを感じるのです。親鸞は明らかに阿弥陀仏への信を最重要視しているような感じを受けるのです。全くのとんちんかんな感想ならごめんなさい。

## 【お答え-2】

最初から「世界平和の祈り」を絶対に信じて祈るという高い境地で祈る必要はありません

んし、そんなことはできないと思います。「世界平和の祈り」を信じなくともよいし、疑ってもよいし、騙されたと思ってもよいから、「これは善い方法かも知れない」と思ったら、試しに「世界平和の祈り」を行ってみたらよいと思います。暫く行ってみて「これは素晴らしい」と思ったら、祈りの行を続けたらよいし、もしも「こんな方法では駄目だ」と思ったら止めたらよいのです。まずは日常生活の中でお祈りする習慣をつけることです。信仰を持つ家庭に育った人以外は日常生活の中でお祈りをする習慣がないと思いますが、お祈りの習慣をつけるためには、「世界平和の祈り」の会合に参加したり、家族に賛同してもらい、家族と共に祈るようにして、お祈りの行事を日常生活の一部にしてしまうことです。そのようにして日頃から「世界平和の祈り」を行っているうちに深い人類愛や感謝の気持ちが湧いてくるようになればもうしめたものです。「世界平和の祈り」は他力易行道でありまして、「神仏を強く信じることのできる立派な心境になってから行じなさい」とは教えておりません。神仏への不信の念があっても、疑い深い想いがありまして、そのままの心境で「世界平和の祈り」に全託すればよいのです。他力の道では、自力で神のような高い心境になろうと力む必要はありません。自力を捨てることです。

法然さんと親鸞さんは、教義の根本はもちろん同じであるのですが、開祖と普及の導師という立場や役目の違いから教え方が多少異なっています。法然さんは「百万遍の念仏を唱えよ」と説き、親鸞さんは「一遍の念仏で救われる」と説いています。親鸞さんは法然さんを信じるだけでよいのですから、信一筋であったのです。親鸞さんは、法然さんの開いた他力易行道をより広くより易しい他力易行道へと発展させたのです。なお、これは役目の違いですから、百万遍の念仏でも一遍の念仏でもどちらでもよいのですが、「そうか。念仏を一遍唱えれば救われるのか。それならば死ぬ前に一遍念仏を唱えよう。死ぬ前に一遍唱えればよいのだから、それまでは唱えなくてもいいだろう」と思っていた人が、死ぬ間際になって、うっかりして念仏を唱えることを忘れ、一度も念仏を唱えずに死んでしまったということがありますから、日頃からお祈りの習慣をつけておいた方がよろしいと五井先生はおっしゃっていました。

## 神様のみ心のままに

### 【ご質問-3】

神仏への不信の念があったり疑い深い想いがあったら「全託する」ことは不可能に思われるのですが、どうなのでしょう？

### 【お答え-3】

おっしゃる通りですね。神仏に全託できたら、もう既に立派な心境です。「全託すればよい」と私が書いたのは、「想いを全て神仏のみ心の中へ投げ入れればよい」という意味で書いたのです。誤解のないように次のように書き直しましょう。

神仏への不信の念があっても、疑い深い想いがありまして、そのままの心境で「世界



平和の祈り」に想いを投げ入れてしまえばよいのです。神を信じられなくても、「世界人類が平和でありますように」と祈り、神を疑う想いが出てきても、「世界人類が平和でありますように」と、「世界平和の祈り」の祈り言の中に入り込むようにするのは、そうしておりますと神仏への信が自然に深まってゆきます。

#### 【ご質問-4】

宗教上の観点から鬱に対するよい対策がありますか？

#### 【お答え-4】

「宗教上の観点から鬱に対するよい対策がありますか？」というご質問については、守護霊様にこのように祈れば解決できます。

「守護霊様、鬱の想いを消して下さい、守護霊様、お願いします。世界人類が平和でありますように」

このように祈ることによって、鬱の想いが守護霊様と救世の大光明に浄められて心が晴れてきます。

それから、鬱状態の時に祈りの集会に参加するのは億劫でしょうが、鬱状態になる前に出来る限り祈りの集会に参加されたらよいでしょう。しかし、地方の人は東京までは遠いですし、時間も費用もかかりますから、「世界平和の祈り」を共に祈る法友を近くに作って、祈りの集団から生じる光明の活気を自分の心に充電しておくことです。そのようにしていれば鬱の時期を軽く乗り越えることができます。

自殺することなど考えないで、何もしないでもよいから、生きることだけを考えることです。生きることだけだったら難しくはありませんよね。欲望があるから苦しくなるのです。この際、自己の欲望を全て捨てて神様に生命を差し上げてしまいましょう。

「守護霊様、あなたさまのみ心のままに為さしめ給え」

と守護霊様に全てを任せてしまうのです。このように祈りますと、心にあった重荷がスーッと消え去って行って心が軽くなるはずですが、この祈りによる癒しの感覚をぜひ体得なさって下さい。

「〇〇さんの天命が完うされますように」

と私たちはあなたの天命の完うをお祈りしております。解決手段の一つとしては、鬱になったら、この掲示板に書き込んで皆さんから祈ってもらい、励ましてもらおうとよいでしょう。あなたは一人ではありません。法友であり同志の私たちがついていてくれるのです。元気を出して下さい。